

## 楽器と演奏について

### ～カホンを主に打楽器による器楽合奏表現指導～

今 田 政 成<sup>1</sup>

#### 第1章 はじめに

幼児期の音感覚は非常に敏感であり、発達段階においてとても重要な時期である。

保育園や幼稚園では器楽導入にあたっては、打楽器が一般的である。音感覚においてはリズム間の発達は基本的な要素である。「楽器と演奏」科目の教授概要としては、「楽器を触る、叩く、振る、弾くなどを通して楽器への興味を深め、演奏する楽しさを味わいながら、乳幼児期の豊かな感性を育てていくための保育実践における楽器活用の意義や演奏方法のあり方について理解する。」とある。カホンを中心に打楽器の能率的な演奏法を身につけ、子供の成長過程でのリズム感の発達、知覚において自由な表現へと導き出せる器楽合奏の指導法を研究することとした。

#### 第2章 カホンについて

カホンはペルー発祥の打楽器の一種で楽器自体に跨って演奏する箱型のものからコンガのように股に挟んで演奏されるものまで、打面が木製である打楽器全般を指す。通常ペルー式カホンを指す場合が多い。カホンはスペイン語で「箱」を意味する。

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部  
e-mail : rikutomo@fc.hakuoh.ac.jp

構造は空洞の長方体の形状をしていて、通常木製だが打面にカーボンファイバー等のプラスチックを用いた製品も存在する。通常前面に1つだけ打面を持ち、打面以外のある1つの面（多くは打面の反対の面）にはサウンドホールが空けられている。打面は他の面より薄く通常2.5～3.5mm程度の合板が使われる。最初カホンには弦などなかったが、スペインのフラメンコ伴奏に使われるようになって以降は打面の裏に弦や鈴などを仕込むことが多く特徴的なバズ音を得ることができるようになった。

歴史は黒人が多いペルー沿岸地域でアフロペルーと呼ばれる黒人音楽に使われていたが、20世紀初頭からスペインやアンデスの原住民の音楽がリマなどの都市でミックスされ、ムジカクリオージャと呼ばれるペルー独自の音楽が発展し伴奏にカホンが使われるようになった。その後ギタリストのパコ・デ・ルシアを通じスペインのフラメンコ伴奏に広く使われるようになり、打面の裏にギター弦を張るなどの工夫がスペインで加えられ、バスドラムとスネアドラムサウンドをカホンは得て簡易ドラムとして世界中に広がり現在に至る。

基本奏法は、楽器の上に跨って、楽器の打面やその縁を素手で叩く、というものである。打面の中央部を叩くとバスドラムのような低い音になり、端の方を叩くとクローズドハイハットのような鋭い音になる。打面でない面を叩くと中音域のサウンドを得ることができる。また、打面の裏にギター弦を張る仕掛けが施された楽器の端を平手で叩くとスネアドラムのような音色を出すことも可能である。

## カホンの基本

- ・座り方           カホンの上に直接跨り猫背になりすぎないように注意する。
- ・構え方           座った状態で前ならえをし、手のひらを下に向けそのまま自然に上部分に両手を置く。
- ・手のフォーム   自然にリラックスした状態で、両手の4本の指の力を抜

いて揃える。

ポイントはリラックスした状態を心がける。

- ・叩き方 基本は3つ叩く場所がある。

### (1) ベースの叩き方

正面の真ん中より少し上

真ん中の方が低音の響いた音色が出そうなイメージがあるが、打面の真ん中より少し上がベストポジションである。

ポイントは親指をほんの少しだけ反らす。親指を前に出していると叩くときに痛いのでイメージとしては手のひら全体が打面に当たるように叩く。強く叩くのではなく手を落とすようなイメージである。叩いた後に手を押さえつけないで（響いている音を止めてしまう）しっかり鳴らしてあげる感じである。

左右で 左右の強さが均一になるように



カホン図1

### (2) タップの叩き方

叩くというより置くイメージにする。

第2関節から上の手のひら全体ではなく指で叩く。



カホン図2

### (3) スラップの叩き方

打面の上部端の部分指で引っ叩くようなイメージを持ちパチンと引っ叩くようなイメージが良い。スナップを利かせて叩くイメージを持ち、コツを掴むまでは軽く叩く。ドラムのように強く叩くほど大きい音が出る楽器ではない。

ポイントとしてはカホンによって出せる最大音量が違ってくるが体をリラックスして叩くことが大事である。



カホン図3

練習方法 1

- |       |         |
|-------|---------|
| ①ベース  | 1. 右手のみ |
| ②タップ  | 2. 左手のみ |
| ③スラップ | 3. 両手   |
| ④タップ  |         |

- |     |      |           |
|-----|------|-----------|
| ①右手 | ベース  | パターン練習    |
| ②左手 | タップ  | 8ビートパターン① |
| ③右手 | スラップ |           |
| ④左手 | タップ  |           |

練習方法 2

3つの基本奏法の④をタップからベースに変える。

- |     |      |           |
|-----|------|-----------|
| ①右手 | ベース  | パターン練習    |
| ②左手 | タップ  | 8ビートパターン② |
| ③右手 | スラップ |           |
| ④左手 | ベース  |           |

右手はベース・スラップの繰り返し

左手はタップ・ベースの繰り返し

注意したいのは全部の音が同じ音量にならない。

練習方法 3

- |     |      |       |           |
|-----|------|-------|-----------|
| ①右手 | ベース  | ⑤タップ  | パターン練習    |
| ②左手 | タップ  | ⑥ベース  | 8ビートパターン③ |
| ③右手 | スラップ | ⑦スラップ |           |
| ④左手 | ベース  | ⑧タップ  |           |

ポイント リズムを声に出す。

練習方法 4

- |     |      |       |           |
|-----|------|-------|-----------|
| ①右手 | ベース  | ⑤ベース  | パターン練習    |
| ②左手 | タップ  | ⑥ベース  | 8ビートパターン④ |
| ③右手 | スラップ | ⑦スラップ |           |

④左手 ベース      ⑧タップ

練習方法 5

①右手 ベース      ⑤タップ      パターン練習  
 ②左手 タップ      ⑥タップ      8ビートパターン⑤  
 ③右手 スラップ      ⑦スラップ  
 ④左手 ベース      ⑧タップ

練習方法 6

①右手 ベース      ⑤タップ      パターン練習  
 ②左手 タップ      ⑥ベース      8ビートパターン⑥  
 ③右手 スラップ      ⑦スラップ  
 ④左手 ベース      ⑧ベース

上手くなるカホンの練習方法

ベース → 腕の重みを使って腕を落とすように叩く。  
 タップ → 手で叩くというよりおくとというイメージで音を出す。  
 スラップ → 引っ叩くようなイメージで音を出す。  
 どの箇所で叩いているかを意識する。

- ①正しい場所で叩いているか
- ②手のフォームがくずれていないか
- ③ベースの叩き方、タップの叩き方、スラップの叩き方をしっかり分けて、出したい音のイメージを作りながら叩く。

### 第3章 カホンを使ってリズム・音遊び

身の回りにある打楽器やカホンを使って音遊び、音楽作りをする。友達と一緒に簡単なリズムや色々なリズムパターンで音楽遊びをする。

シラバス案として

- (1) 目標としては、カホンを使って音遊びをしながら複数の種類の音の特徴を感じ取りそれを生かした表現をする。

リズムのパターンを手がかりとして、一つのまとまりのある簡単な

合奏へとつなげていく。

(2) 内容としては、カホンを使ってリズム・音遊びをしながら、様々な音の面白さに気付くようにする。

リズム・音の仕組みを手がかりとして、簡単な合奏を演奏する。

(3) 評価基準は、音そのものやリズムの仕組み等に関心を持ち、意欲的に関わり歌や合奏に意欲的に取り組んでいる。聞き取った音楽の仕組みなどの面白さを感じ取りながら、どのように合奏を作るかについて考えを持っている。表現の技能としては簡単なリズムパターンを正確に模倣したり作ったりしている。

指導計画は

グループによる音楽作りの場面でカホンから様々な音の出し方を探す。

- ・カホンから出るお気に入りの音を探す
- ・好きな音を1回ずつ鳴らす
- ・教師がカホンでリズムを叩き、同じリズムを学生達が模倣する
- ・学生達が簡単なリズムパターンを作る
- ・作ったリズムパターンをつなげたり、模倣したりする

学習展開……………音・リズム遊びを通して、カホンから音の出し方を探るとともにリズムをつなげたり模倣したりすることを楽しむ。

	講義内容	指 導
導 入	カホンから色々な音の出し方を体験する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カホンの扱い方、座り方を説明し演奏を聴かせる。</li> <li>・グループが輪になり音のリレーをする。</li> <li>・一人が出した音を模倣する。</li> <li>・リズムパターンを模倣させる。</li> <li>・リレー方式で行う。</li> </ul>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カホンについて理解する。</li> <li>・音の出し方を一人一人確認する。</li> </ul> 音を模倣しながらつなげていく。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・探した音をリレー方式で叩いていく。</li> <li>・リレー方式に模倣を加える。一人が探した音をその後全員で同じ音をだしてみる。</li> </ul> リズムを模倣したり作ったりする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者がリズムパターンを演奏し、学生がそれを模倣する。</li> </ul>	

<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が簡単なリズムパターンを作る。</li> <li>・作ったリズムパターンをつなげたり、みんなで模倣しながらつなげたりする。</li> </ul> <p>グループで音楽作りをする計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・6人グループで一つのリズム音楽を作る。</li> <li>・一人ひとりが作ったリズムパターンをつなげたり、模倣しながらつなげたりして一つのリズムの形にする。</li> <li>・音楽の始め方、終わり方を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リズム・音楽の仕組みを理解し、音楽作りのアイデアを話し合う。</li> </ul>
------------	--	---

指導のポイントとして

- ・身近にある楽器そのものの音に対する関心を持ちそれを合奏に生かす経験をさせる。
- ・色々なリズムを習得することで、その後の合奏にスムーズに移行させる。
- ・歌唱を入れた合奏に取り入れ、音楽表現に生かせるようにする。

## 第4章 他の打楽器について

幼稚園教育要領に示されている「リズム楽器」とは、幅広い打楽器のうち幼児がリズム表現するのに用いる比較的簡易なものを指すのである。

それぞれの楽器の特徴・奏法について



### 大太鼓

比較的どの園にもある楽器である。叩きやすい位置にくるようにスタンドの高さを調節します。幼児用の椅子や机の上に置き上下の動きで叩けるようにすると良い。曲によっては打面を手で押さえながら打つ方が、余韻が長くなりすぎなくて良い。

合奏の時に音量が大きくなりすぎる場合はティンパニーのマレットを使用すると良い。



### 小太鼓

表皮、裏皮とも平均に皮が張れるようにネジを対角線上にしっかり締める。対角線上に締めたらネジの根もとの皮をバチで打って音を確認する。

皮の調節は幼児では無理なので指導者が行う。両手とも下向きの手でバチを持つ。打面がおへその少し下あたりにくるようにスタンドの高さを調節します。スティックの持ち方は人差し指の第一関節あたりと親指でもち、残り3本の指で支えます。

裏面にあるバネ状の針金はスネアといい小太鼓のことをスネア・ドラムともいう。スネアはレバーで鼓面につけたりはずしたりできるので二通りの音色を生かして使うことができる。



### タンバリン

太鼓と鈴の組みあわされたような特徴があり太鼓の音を出すには良く弾ませて打つことが大切である。鈴の音が歯切れ良いリズムとなるよう、持ち方や鳴らし方が大切である。

持ち方は棒の全体を握るように持って、利き手で打つ。幼児の手の大きさにふさわしくないサイズが多いので親指を棒のうち側に沿わせて握ると良い。

打ち方は楽器をほぼ水平に持ち、利き手の指を揃えて軽く曲げ、指の腹でヘッドを叩きます。中心に近いほど太鼓の音が生かされ、ふちに近いほど鈴の音が響く。指先で軽く打つほか、こぶし、手のひらや体の部分に打ち付ける奏法もある。叩いたり、振ったり、ヘッドを擦ったりして子供たちへ音の違いを体験させる。



### カスターネット

幼児には手拍子の延長として、すぐに与えられるものである。ゴムの輪で縛ってあるものが大半を占めるが、親指に紐で固定して使うフラメンコ用や柄がついていて振って鳴らすものなど種類が多い。ゴムは軽く打って鳴る弾力と、幼児の指に楽に通る輪の大きさに気をつけて、組み立て直すように心がける。利き手ではない方の中指にゴム紐をはめ、利き手の指の腹で叩く。楽器全体を手で覆うようにして叩くと、こもった音が出たり、人差し指と中指を交互に（ピアノでトリルを弾くように）動かすとロール奏法ができる。



### トライアングル

鋼材の質も良くなり響きが良くなっている。左手の人差し指に紐を通し親指と人差し指で紐を抑える。中指・薬指・小指は本体を触らないように持ち、右手でピーターの下の方を軽く持つ。トレモロは三角のところで左右に細かく連打する。音量の調節のため、ピーターの太さは色々そろえたい。幼児には大きくて重すぎるのもあるので注意したい。3つの辺を叩いて響きの違いを比べたり、響きがある間に楽器を上下左右に動かして響きの変化を体験させる。



### 鈴

輪の周りに鈴や小さなベルをぐるりとつけたものや棒状のスティックに縦に鈴が並ぶものなど種類がたくさんある。少し動かすだけで音がなってしまうので細かい注意が必要である。鈴を持った左手の手首を右手で軽く打つことで細かいリズムを出すことができ、手首の回転でトレモロ

奏法ができる。ロール奏法をしながら腕を上下に動かすと、音が大きくなったり小さくなったりするのを体験する。



### ウッドブロック

共鳴のための空洞をもつ木の楽器で、円筒形のものや箱型のものである。

色々な大きさのものがあるので、組み合わせを考え、ビーターの硬さを変えて音色を選びたい。利き手でビーターの端を軽く持ち、もう一方の手でホルダーを持つ。この時、右側が高い音になるようにして、筒の外側の方を叩く。



### 鍵盤ハーモニカ

吹き口を唇で軽く挟み、「トゥー」と息を吹き込みながら鍵盤を押す。

水抜きボタンを押しながら息でリズムをとる練習もできる。音を出しながら本体を揺るとビブラートがかかる。



### ミュージックベル

鐘を上に向けて親指以外の4本でハンドルを握り、親指を立てて支える。鐘を上に向けて中のクラッパーが鐘に当たるように振る。前後左右に細かく連続して振ってトレモロ奏法をする。音の余韻を消したいときは、ベルを胸に押し付けたり鐘に指をあてて音を消す。鐘の部分に指を触れたまま音を出したり（スタッカート奏法）離して音を出したりして響きの違いを体験する。

## 第5章 合奏指導の展開

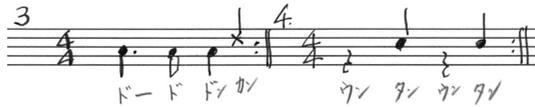
子どもたちと楽しめる6種類のリズムパターン

下向き音符を足で 上向き音符を両手で

ドン タン ドン タン ドド タン ドド タン



ドード ドンカン ウンタン ウンタン



ドン タン タン ドン ドン ドン タン ドドード ドン タン



### 合奏指導の進め方としては

1. メロディーを歌って覚える。ピアノでメロディーを弾いて歌ったり、歌詞があれば次に歌詞をつけて歌うと良い。拍子に合わせて指揮をするのも良い。4・5歳児には最終的に「ド・レ・ミ」の階名唱で歌えると良い。
2. 基本のリズムパターンを手と足で打つ。前述した基本リズムパターンを全員が体験する。リズムを打ちながら、曲の構成を子供達と確認する。
3. 楽器に慣れる。楽器を持って実際に打ってみる。4・5歳児には色々な楽器に慣れるために楽器を交代して全員が全部の楽器に触れる。  
4・5歳児は音程のある楽器も体験する。(鉄琴・木琴・鍵盤ハーモニカ)
4. 楽器を十分に体験できたら、やりたい楽器を決める。できるだけ子ど

もの自主性を尊重して決め、人気のない楽器（鍵盤ハーモニカ等）は特徴を興味が持てるような説明をしたり、メロディーがわかりやすいなどと言葉かけをするのも重要である。

5. 曲をいくつかに区切って、少しずつ範囲を広げながら部分練習を取り入れる。一気に合わせるのは難しいので、パート別でゆっくりと練習していく。
6. 全体練習は全員並ぶ場所にも工夫をして、気になるところはその都度言葉かけをして良いところは必ず褒めると子どもたちの自信にもつながる。並び方は部屋の広さにも違いはあるが、子どもたちの顔がきちんと見えて重ならないように注意する。
7. 仕上げは、テンポや強弱などもしっかり話し合っておく。全員で何度も合わせた後の仕上げは、テンポや表現についても話し合っておくと全員の意識が高まりまとまる。

#### 器楽合奏のための準備

子どもたちは実際の楽器を見ると非常に興味を示しますが、楽器を持つと音を出すこととばかりに夢中になって部屋が音で溢れてしまう。まず大切なことは「音を聴く」ことや「聴く耳」をしっかりと意識させること。また決まった音の出し方を習う前に、一人ひとりが創造的に音の出し方を見つけることも大切になってきます。きれいな音や耳ざわりな音など、どうしたら楽器が壊れてしまうのかなども学ぶことが大切になってきます。十分に楽器にふれ、音への興味を養うのが準備の段階で重要だと考えられる。

器楽合奏用に編曲した2曲は、2・3歳児向けと4・5歳児向けで使用している楽器を年齢に合うものに考慮し、また異年齢で一緒に演奏できるようにアレンジした。

楽譜 世界中のこどもたちが 2・3歳用

複数のパートでそろえるリズムの練習



足踏みしながら手拍子でリズムを叩きしっかり揃える



世界中のこどもたちが 2・3歳児用

楽譜 世界中のこどもたちが 4・5歳用

4分音符をきざむ楽器と小太鼓、大太鼓、カホンのリズムが土台になって正確なテンポで演奏できる。

世界中のこどもたちが 4・5歳児用

楽譜 メヌエット ト短調 2・3歳用

曲全体は、3拍子を感じながら  
ゆったりと演奏できるように心が  
ける。

「ズン チャッ チャッ」の3拍子の基本のリズムが叩けるようにする。  
鈴の3拍目の休符は、最初手拍子などで感覚をつかんで練習する。3拍  
目が見つからないようにしっかりリズムを覚えて叩けるようにする。

メヌエット ト短調 2・3歳児用

楽譜 メヌエット ト短調 4・5歳用

曲調の変化や楽器の音の重なりを感じながら演奏する。

打楽器のリズムをしっかり覚えてそれぞれの楽器の掛け合いを練習する。

鍵盤ハーモニカは2つのパートがずれないように注意し、音は短めに切って軽やかに演奏する。

鉄琴、木琴のハーモニーは優しい音色で滑らかに演奏する。

メヌエット ト短調 4・5歳児用

The first system of the musical score consists of six staves. From top to bottom, they are: Piano (鍵盤 ハモディ), Cello/Double Bass (チェロ 大提琴), Violin I (小大提琴), Violin II (餘 9:7), Viola (カボソ), and Piano/Double Bass (ピアノ). The key signature is G minor (two flats) and the time signature is 3/4. The piano part features a rhythmic accompaniment of eighth notes, while the strings play chords and the cello/bass plays a simple bass line.

The second system of the musical score continues the piece with the same six staves as the first system. The piano part continues its rhythmic accompaniment, and the string parts play their respective parts. The notation includes various musical symbols such as beams, slurs, and dynamic markings.

## 第6章 まとめ

幼児期の音感覚は非常に敏感であり、発達段階においてとても重要な時期である。

保育園や幼稚園では器楽導入にあたっては打楽器が一般的であり、音感覚においてはリズム間の発達は基本的な要素であると考えられる。

カホンや打楽器を通して音遊びの面白さに気づいたり、音楽作りで子どもたちが使うことのできる音楽の仕組みに気づいたりする理解の過程が重要であると考えられる。

子どもたちがリズムの音楽を作る時には、一人があるリズムパターンを演奏したらそれを同じリズムで返す場合（反復、問いと答え）や違うリズム（問いと答え）で返す場合も出てくる。重要なのはどんな考えで音楽作りをしようかと意図することである。カホンや打楽器の基本奏法や音色をしっかりとマスターし、自由に音楽を形づくっているリズム要素を表現できるようになることが大切であると考えられる。

器楽合奏の導入でまず大切になってくるのが「音を聴く」、「聴く耳」で、これができるようになると子どもたちの音の出し方や楽器の扱い方が変わってくる。楽器活動を魅力的にするために、その活動をスムーズに行うことができるように「聴く」ことが重要であると考えられる。

遊びながらすぐのできる合奏（アンサンブル）の導入としては、歌詞のある曲を全員が覚えるまで歌って覚えると活動がスムーズに進行する。集中して楽器を鳴らす活動の前には、十分に楽器を鳴らす練習をして「音を出したい気持ち」を満たしておく。音を出しそびれている子がないか、楽器を鳴らすタイミングがずれている子がないかの指示をしっかりと出す。

合奏を通して、子どもの中で育っていくものは楽器に触れる良い機会であり、親しみを持ち年少、年中、年長と上がっていくごとに新しい楽器にふれられるとても良い体験である。

合奏を通してクラスの皆と気持ちを合わせて、ハーモニー、リズム、メ

ロディーを合わせて演奏する喜びを経験することができる。またハーモニーを感じ、フレーズ感、拍子感という音楽の基礎能力を身につけることができる。合奏は自分が参加して、皆と一緒に「喜び」「達成感」「満足感」を分かち合える。

ひとつの楽器が欠けても曲が仕上がらないことを丁寧に話し、皆で作っていく大切さを伝えることが重要であると考えられる。幼稚園教育要領、保育所保育指針の「協同性の育ち」への活動であると考えられる。

### 引用・参考文献

ここからはじめるカホンの教科書 シンコー・ミュージックMOOK  
カホン トレーニングブック はたけやま裕 著  
小学校音楽の題材モデル20 低学年編 高須一・佐藤日呂志 編著 明治図書  
楽器あそびと合奏の本 深見友紀子監修 赤羽美希 著 YAMAHA  
やさしい・楽しい器楽合奏集 安藤真裕子・泉まりこ編曲 ナツメ社  
合奏楽譜集 佐藤千賀子 編著 ひかりのくに社

### タイトル 英文表記

Musical instruments and performance : Teaching percussion ensemble. with a focus on cajón instrument

